

嚶鳴館遺草卷第三

もりかがみ

○およそ草木を植そだつるに、二葉三葉より成長して用にたつ木草となるまでには、始中終の三段あり。

草に勁草あり、木に堅木あり。然どもそのはじめ苗草苗木の時は、いづれもしなやかにして、直にもそだち、曲てもそだつべし。是其始也。

既に草となり木となれば、勁き質の草木は年月につよみわたりて、副木をたて繩をまとひて、のべかがめんとすれども、最早こころのままならず。是中也。

嚶鳴館遺草卷の第三

もりかがみ（守鏡。子育ての手本）

○だいたい草木を育てるのに、芽が出て二葉、三葉のころより成長して、役に立つ草や木となるまでには、始めと、中ごろと、終りの三段階がある。

草には風雪に耐える強い草があり、木には堅い木がある。しかしそれらも、はじめの苗草や苗木のときには、どれもしなやかで、まっすぐにも育つし、曲がってしまうものもある。これが、始めの段階である。

そして、すでに成長して草となり木となってからでは、強い性質のものでは年月を経るほどに強くなってしまつて、添え木をして繩を巻いて、伸ばしたりかがめたりしようとしても、もう思いのままにはならない。これが、中の段階である。

花はなさき実みなり、枝えださし葉はしげ茂りて、□ それぞれの用よう

にたつほどになりおふせたるは終おわりなり也。

まづ此始このはじめなかわり中終やしなの養こころひに心こころをつくべきこと也。なり

苗木なえぎ苗草なえぐさの時ときより心こころをつけて育そだてれば、苦くろう勞らうもな

く良りよう草そう良木りようぼくの用ようを成なすこと也。なり しかし苗木なえぎの自じ

由ゆうになればとて無むり理りに曲まげ撓たわめて心こころのままにせん

とすれば、いかなる勁けい草そう堅木けんぼくも或あるいは枯かれ、或あるいはい

たみて、たとひ年月ねんげつを經へてもいじけ、ひねびて、□

材用ざいように備そなふべからず。

草木くさきのみにあらず、禽獸きんじゆうも又またしかり。駒くま兒じ、犢とくぎゆう牛う、

犬けん子し、猫びようじ兒じの育そだてまで始はじめなかわり中終はじめなかわりはあるもの也。なり

そして、花が咲き実がなり、枝が出て葉が繁り、それぞ

れの役に立つようになったのが、終りの段階である。

はじめに、この始め、中、終りの三段階の養育に心をつ
くさなければならぬのである。

苗木や苗草のときから気をつけて育てれば、苦勞せずに
よい草、よい木として役に立てることがでる。しかし、苗
木はしなやかでどのようなにもなるからといって無理に曲げ
て、自分勝手にしようとするれば、どのような強い草、堅い
木であっても、一方では枯れ、一方では痛んでしまい、年
月を經ても伸び伸びとせず、曲がってしまい、材料として
使うことができない。

このことは草や木だけのことでなく、動物も同じであ
る。子馬、子牛、子犬、子猫を育てるにあたって、始め、
中、終りの三段階がある。

故ゆえによく獸けものを飼かふものは、始はじめなかおわり中終したがに随むりひ無理むりをほどこさずして、それぞれせいの生つげを遂ひとしむ。人は万物ばんぶつの靈貴れいきなるものといへども、始はじめなかおわり中終したがのあることは聊いささかも異なることなし。

故ゆえに古いにしえの聖人せいじんきようかい教誨みちの道みちをつとめて、人情にんじようを遂とげさしめ給たまふ。尊卑貴賤そんびきせんしな品おしえはかはれども、教おしえといふ道みちをすてて性命せいめいをたつべき道みちなし。

さて其教そのおしえの法ほうに始はじめなかおわり中終したがをわけて、天てんの性せいに逆さからひもとらぬやうに定めおき給たまひしこと也なり。

ですから、うまく動物を飼う人は、始め、中、終りの三段階に従って、無理をせずにそれぞれ成長させる。人は万物のなかにあつて靈が貴いものではあるが、始め、中、終りの三段階があることは、すこしも違わない。

だから、昔の聖人（高い学識と人徳をもつ理想的な人）が、教えさとす道をつとめられて、人に対する思いやりやいつくしみの心を、かなえさせてくださる。尊い人、いやしい人、身分の高い人、低い人といろいろいても、この教えの道理を捨ててしまつては、人として育つことはできない。

そこで、教育の方法を始め、中、終りの三段階に分けて、生まれつきの性質に逆らうことのないように定めておかれたのである。

○人の始中終は、幼少を始とし、強壯を中とし、老衰を終とす。この三時に随ひ教戒を施す法、一同ならずといへども、先おほよそを語らば、聖人の教は乳をふくみて眠り、飯をくくめられて戯るる孩児には、元服して上下着こなしたるものの、わざをさせず。上下着こなして元服したればとて、頭はげて額にしわのよりたるものしりよぶんべつの思慮分別をせめず。しょうそうろう みつつ とし少壯老の三の時に随ひて其みごとなるべきことをなさしむるやうに教ること也。

○人の始め、中、終りの三段階は、幼少のころを始めとし、元氣な働き盛りのときを中とし、年をとって心身が衰えたときを終りとする。この三段階に応じた教育の方法は、同じではないが、まずその概略を話すと、聖人の教えは、乳を飲んで眠り、ご飯を食べさせてもらって遊び興じる幼子に、成人してきちんと着物を着るようになった者への方法や手段をさせない。きちんと着物を着るようになった成人になったからといって、頭がはげて額にしわのよった年老いた者が慎重に考えて物事を判断するといったようなことを求めない。

幼少、壮年、老年の三段階に従って、それぞれの年代でりっぱに過ごすことができるように教えることである。

但し人は万物の靈にて、心もまた靈知はやきもの
なれば、苗木苗草の時より其身其程につれて、
善心善行にむかふやうにと、導き教えることも、
また大事の教也。
無理にまげたわめねども、自然と成長せしめて、
それぞれの徳を成就せしむること、いたらぬ所
もなきは、聖人の教なり。すでに胎教といひて、
懐妊のはじめより視聽言動をつつしませて、生る
子の吉祥を望むことなれば、まして生れたるう
へのことは申にも及ぎること也。

しかし、人は万物の靈（人は万物なかで最も貴い）であ
るから、その心もはかりしれないほどすぐれた不思議な知
恵が早くつくので、苗木や苗草のときより、それぞれの成
長に応じて、よい心を持ち、よいおこないをするやうにと
導き教えることも大事な教えである。
無理に折り曲げるやうなことがなく、自然に成長させて、
それぞれの徳（りっぱな行いや品性）を成し遂げさせるの
に、何ひとつも不足がないのが、聖人の教えである。
子どもができるのと、胎教といって、身ごもったときから、
見たり聞いたりすること、言ったりおこなったりすること
を慎んで、生まれてくる子の幸せを願うのであるから、な
おさら、生まれてきてからのことは、いうまでもない。

ゆえ おしえ みち まずだいいち おしえ ひと ぜんあくじゃせい
故に教の道は、先第一に教る人の善悪邪正を
えらぶ ようじゃくとうしん うえ
撰にありて、幼弱当身の上をせむるのみにあら
ず。習慣は自然の如しと孔子も仰られて人君の
そんき しゅうかん しぜん ごこと こうし おおせ じんくん
尊貴なるより衆庶の卑賤なるに至るまで、その
しゅうかん ところ つつし ひと おしえ ごくい
習慣する処を慎むこと、人を教るの極意なり。

よって、教育においては、まず第一番に教える人が、よ
いことと悪いこと、不正なことと正しいことをきちんとわ
きまえることであって、幼くて弱い子どもをせめることで
はない。

「習慣は自然の如し」〔孔子家語（七十二弟子解）〕長年にわ
たって身についた習慣は、生まれついての性質と同じもの
となる。習い性となる。」と孔子もおっしゃっているように、
君主の貴い方から庶民の身分の低い者まで、その習慣とす
るところを、慎重におこなうことが、教育の核心となる大
事なことである。

○無位素賤の人の子は僅に乳ぶさを放れ候むいそせん ひと こ わずか ち はな そうろうこ
ろより、うちには父母兄長の威を恐れ、外には他ふほけいちよう い おそ そと た
人の戒を憚りて、いまだ是非の道理は弁へしにん いましめ はばか ぜん ひ どうり わきま
らねども、何となく遠慮挨拶するものといふことなん えんりよあいさつ
を知る。是素賤の人の人を畏敬するに習ひ慣たるし これそせん ひと ひと いけい なら なれ
もの也。なり

○何の位もなく身分の低い者の子は、乳離れのころより、
家内では、父、母、兄、年上の者の厳しさを恐れるように
なり、外では他人の注意を気にするようになって、まだ、
正しいことと正しくないことをわきまえてはいないのであ
るが、そういう目上の人に対しては、なんとなく遠慮して
挨拶をするものであるということを知るようになる。こう
して身分の低い者の子が、人を恐れ敬うことを習って普通
のこととして受け入れられるようになるのである。

然るに尊貴の人の子は、胎内よりひとにうやまは
しか そんき ひと こ
 れ出生し給へば、其俣おびただしき尊崇をうけて、
しゅっせい たま そのまま そんすう
 僅に人を見知り給ふより、人々畏敬の心をいだ
わずか ひと みし たま ひとびと いけい こころ
 き、前に伺候する程の者は息をひそめ容を守りて、
まえ しこう ほど もの いき かたち まも
 先其座の機嫌をのみはかりて取扱ひ奉ること
まずそのぎ きげん とりあつか たてまつ
 にて、たとひ父母兄長の教戒をうけ給ふほどの
ふぼけいちよう きようかい たま
 ことありといへども、稀たまさかなることにて、
まれ
 其余は常に臣妾の介抱のみにそだち給ふこと
そのあまり つね しんしやう かいほう たま
 なれば、幸に善良の質を受給へば、それが中に
さいわい ぜんりやう しつ うけたま なか
 ても賢明の君とはなりたまふもあれども、もし不
けんめい きみ ふ
 幸にして驕傲の氣象を受給へば、遂には暗愚
きょう きやうごう きしやう うけたま つい あんぐ
 暴戾の君に終り給ふ。古今みなしかり。
ぼうれい きみ おわ たま ここん

それにもかかわらず、身分の高い人の子は、胎内にいる
 ときから人に敬われ、出生されたなら、そのままおびただ
 しくあがめたたえられ、少し人を知るようになられても、
 人々は恐れ敬う心を持ち、直接その子に仕える者は、身を
 ひそめて形を整えて、まず、その場だけの気分をとりつく
 ろうような取り扱い受けられます。(ですから、)たとえ、
 父、母、兄、年上の者から教えや戒めを受けるようなこと
 がっても、まれなことであって、それ以外はいつも従属す
 る者の世話を受けて成長される。(だから)幸いに良い資質
 を持つておられれば、そうした身のまわりであっても、賢
 明な君主となられるでしょうが、もしも不幸にして、驕り
 高ぶる資質であれば、ついにはおろかで道理に反するおこ
 ないをする君主となってしまうことは、昔も今も、そのと
 おりである。

是これはひとひたすら人に畏敬尊崇せらるるにのみ習慣しゅうかんして、人を畏敬尊崇するに習慣しゅうかんし給はざる故也。故ゆえなりにいにしへより師傳しふの礼を尊とうとくして其威そのいを嚴げんにし、日夜にちやにその教戒きようかいを服受ふくじゆして、畏敬尊崇する道みちを習慣しゅうかんせしむること、いにしへの三公三孤さんこうさんこのまうまうけは是が為也。礼記らいきには天子てんしの太子たいしといへども、学がく宮きゆうに至り給へば年長ねんちようの下に座ざし給ふことをしまたてんしるし、又天子またてんしに、ものををしへ申時もうすどきは臣下しんかといへども北面ほくめんせぬといふことをしるせり。是これにて古いにしえの教おしえをかながみるべし。

これは、ひとすじに人に恐れ敬われ、あがめられることだけを習慣として、人を恐れ敬い、あがめることを習慣に

されていなかからである。

だから、昔より、先生への礼儀を尊び、その力を厳しくして、昼も夜も、その教えに従って、恐れ敬って尊敬することを習慣づけさせた。昔から、三公たいし〔周の太師・太傅・太保〕、三孤さんこ〔少師・少傅・少保〕で、三公の下に位した」といった天子の先生をもうけたのは、このためなのである。

『礼記』〔中国、前漢時代の経書。五経の一。四十九編。「儀礼」の注釈および政治・学術・習俗など礼制に関する、戦国時代から秦・漢時代の説を集録したもの。〕には、天子の太子であっても、学宮（学問所）においては、年長の者の下に座ることを記しているし、また、天子であっても、教えるときには臣下であっても北面しないということを書いている。これらのことによっても、昔の教育のあり方を考えてみるべきである。

幼おきなより習慣しゅうかんする所ところを慎つつしましめて、いつの程ほどにか賢明けんめいの徳とくを成就じょうじゆすること、苗木なえぎ苗草なえぐさの時ときより手木しゅぼくをそへ力繩ちからなわをはりて、屈曲くつきよくをふせぎ良りよう草そう良木りようぼくの用ようを成就じょうじゆすると異なることことなし。

○教おしえあり類るいなしと、孔子こうしものたまひつれば、人ひとはただ、をしへ次第しだいなるもの故ゆえに、教おしえ人ひとを撰えらむことと最初さいしよ第一だいいちの要かなめなり。曲まがれる木きをたてて直すぐなる影かげを得うべからず。よからぬ教戒きょうかいの下もとに、よき人ひとの出いでくべき道理どうりなし。但ただし直すぐなる木きをたてて正ただしき影かげを求めんとすれども、日月にちげつの光ひかりなくしてはかけはささぬものなり。

幼いときより習慣とすることを慎み深くおこない、いつの間にか、賢明な徳を成し遂げられるようにすることは、苗木苗草のしなやかなときから添え木をして、繩を張って、曲がることを防いで、よい草やよい木になるようにすることと同じである。

○「教えありて、類なし」〔教育によって、人間の区別がなくなるのだ。〕と孔子がおっしゃっているように、人は、ただ教え（教育）によって成長するものだから、その教える人（教師）を選ぶことが、まず第一に重要なことである。曲がった木を立てて、まっすぐな影を得ることはできない。悪い教えのもとで、よい人が育つ道理はない。

しかし、まっすぐな木を立てて、まっすぐな影を得ようとしても、日や月の光がなければ、影はできない。

師傳しふの礼れいを尊とうとからしめ、その威いを嚴げんにあらしめ
給たまふことは、先君せんくんの命めい爵しやくを尊とうとくし、愛敬あいけいをあ
つくし給たまふより始はじめることなり。いかばかり忠賢ちゆうけん
の士しといへども、受うくる所ところの命めいいやしく、遇ぐうせらる
る所ところの恩おん、疎そなれば、世子せいしの畏敬いけいをおこすべき道みち
なし。

○師傳しふ一人ひとり忠ちゆう良りやうを得えるといへども、近習きんじゆうの臣和しんわ
一いつならざれば、養長ようちやうの道達みちたつすることなし。幼おきなき
御心みこころにて誰彼だれかれがいへる所ところはよく、これかれが申もう
し所ところはよからずなど弁別べんべつし給たまふべき道理どうりなし。

先生に対する礼儀を尊重して、その威力をおごそかにす
ることは、祖先の位を尊敬して、愛し敬うことを厚くする
ことよりはじまることなのである。どんなにかまごころを
もったすぐれた家臣であったとしても、命ずる勤めがいや
しいことであつたり、処遇がきちんとなされていなければ、
世継ぎが心から恐れ敬う道理がない。

○先生一人を、忠義で善良な人を得たとしても、(お世継ぎ
の)そばに仕える家臣の気持ちが一つになっていなければ、
養い育てる道を達成することはできない。幼い心で、誰の
言うことがよくて、誰の言うことが悪いといった判断がで
きる道理がない。

ひと 一かたにては宜しと申、一かたにては悪しと申、
ひとり またひとり
一人とふるまへば、又一人はかくして見せ奉る
ときは、かならず心まどひ給うて、はてはては
じこ 己の心よく思ひ給へるかたに、落着し給ふよ
ほか 外はなし。これ教の敗るる所なり。師傳一人い
ちゅうせい ばかり忠誠を尽し候とも、一齊人に衆楚言
つく そろろ いちせいひと しゅうそのげん
ついで たせい のたとへにて、遂には多勢にさまたげらるること、
なり よんどころなきこと也。

一方でよいと言い、もう一方で悪いと言ったり、ひとりがこうですよと見せ、もうひとりがそうではなくてこうですよと見せるときには、必ず迷ってしまい、結局は自分が気持ちよく思われるほうに落ち着いてしまうしかない。

これでは教育の失敗です。先生一人がどんなにかまごころをつくしても、「たった一人の齊人が傳役（先生）としてそばにいても、大勢の楚人が子息に楚語でしゃべりかける日常ならば、齊語をおぼえさせようとしても、ものにならないでしょう」（孟子）というたとえのとおり、しいには、多いほうの勢いにさまたげられてしまうのは、しかたのないことである。

かつまたしふ せいし そんけい たま ひと
且又師傅は世子の尊敬し給ふ人といへども、二六
じちゆうまえ しこう
時中前にも伺候せざれば、退て後は近習の臣、
しふ おしえたてまつ げんこう さと たてまつ もつ
師傅の教 奉りし言行をすすめ諭し奉るを以
て、習慣も熟し給ふことなり。

もしまた きんじゆう しんいちげんいつこう しふ おしえ かるん
若又、近習の臣一言一行も師傅の教を軽じ
あなどり たてまつ いちにち とおか
侮てみせ奉れば、これぞ一日あたためて十日
こごやかすのたとへにて、習慣も敗れ給ふもの故
に、ひとり師傅のみにあらず、近習の臣に忠良
をえらぶこと、是又大事なること也。

かつまた、先生は世継ぎが尊敬すべき人であるといつて
も、一日中、世継ぎの前におられるわけではないので、先
生が退かれてからは、側に仕える家臣が、先生の教えを大
切にして、言うこととおこなうことを納得するように教え
導くことによつて、習慣として身に付くようになっていく
ものなのである。

もし、側に仕える家臣が、たとえ一言や一つのおこない
であっても、先生の教えを軽んじて、見下すようなことを
見せるならば、これこそ、「一日温めて、十日こごやかす」
〔一日勉強して十日なまけることのたとえ。〕（孟子は、生
長しやすい植物でも、育てるのに、このようにしては生長
しない、といった。）といったたとえのように、せっかくの
習慣も、習慣ではなくなってしまうので、りっぱな先生を
えらぶだけではなく、側に仕える家臣も忠義で善良な者を
選ぶことが、これまた、大事なことである。

古今ともに中以上の君は、世子の為に師傅を撰給ふことは心づき給へども、近習の臣をえらび給ふに及ばず。たとへば病を治せんとて、一薬を施し十毒をいまざるが如し。参附姜桂の良薬といへども、毒に合せて用る時は毒の能さかなり。

昔も今も、中くらいより上の君主は、世継ぎのために良い先生を選ぶことについては気づくのですが、側に仕える家臣を選ぶことまでは配慮しておりません。それはたとえば、良薬を施しながら、十の毒を避けないようなことです。参じん紅参こうじん〔高麗ニンジン・気力アップ、滋養強壯、精力増進、免疫力アップ、元氣回復〕や附ぶし附子〔トリカブト・体力の低下した人の冷えや痛みを使用〕、姜かんしょう干姜〔シヨウガの根茎を乾燥させたもの。漢方で健胃・鎮嘔・鎮咳薬などに使用〕、桂けいし桂枝〔桂皮・健胃作用のほか発散作用があり、のぼせや頭痛に使用〕といった良薬であっても、毒とともに服用するときには、毒の効き目のほうが強くなってしまう。

なべて善ぜんの重目ちようもくはかるく、悪あくの重目ちようもくはおもし。

十人じゆうにんの臣しんに一人ひとり不良ふりようの臣しん立たちまじれば、一人ひとりの毒どく

まはり、すみやかなり。尤もつともはやく退しりぞくべし。ま

して十人じゆうにんに三人さんにんとも不良ふりようの臣しん交まじりつかうまつ

れば、七人しちにんの忠良ちゆうりようは有あつてもなきが如ごとし。古いにしえよ

り然しかりなり。

総じて、善の重さより、悪の重さのほうが重いもの。十

人の家臣の中に、一人のよくない家臣が混じっていれば、

その毒のまわりは早い。すばやくやめさせなければなりま

せん。一人ですらそのようなことですから、十人中に三人

ものよくない家臣が混じって仕えていけば、あとの七人の

よい家臣は、いないのと同じことである。

おかしから、そのとおりである。

○賈誼かぎがことばに、天下てんかの命めいは懸たいし於にか太子たいし、といへり。国郡こくぐんといへども其そのまつりごと政めを目出度めでたくせんと思ふおも時は、只一人ただひとりの君きみの心こころをたねとして出いでくること也なり。されば其君そのきみの心こころを正善せいぜんに帰きし奉たてまつることは、師傳しふひとりおしえの教ゆえにかかること故ゆえに、師傳しふの任にんより重おもき任にんはあらず。師傳しふの徳とくは仁厚長者じんこうちやうじやなるを第一だいいちとして、師傳しふの才さいは博学多通はくがくたつうなるを第一だいいちとす。

○賈誼かぎ〔紀元前二〇〇年〜紀元前一六八、年中国・前漢時代の政治思想家・文章家〕の言葉に、「天下の命は太子に懸かる」〔天下の運命は太子に懸かっており、太子の善は早くから教え諭すこと及び左右のものを選ぶことにある。〕とある。国や郡〔全国を国・郡・里の三段階の行政区画に編成。〕であつても政治をよくしようと思ふとき、それは君主の心を種（基）にして生まれ出てくるものでございます。ですから、君主の心を正しくて理にかなうようになさっていただくことは、先生一人の教えにかかっていますので、先生の任務より重いものはないのである。先生のすぐれた品性とは、人間性が豊かで、穏やかな人であることを第一として、先生の才能は、ひろく種々の学問に通じていることを第一とする。

其人仁厚なれども博通ならざれば、そのひとじんこう はくつう 曉諭の道ゆぎょうゆ みち きわたらず、其人博通なれども仁厚ならざれば、そのひとはくつう じんこう 忠篤の誠うすし。ちゆうとく まこと この両様を兼たる人を、成全りようよう かね ひと せいぜん の師傅とすべし。しふ 但し学徳全備の君子は常にしもただ がくとくぜんび くんし つね あらず。まづ人となりおとなしく正直にして、人けん ひと ぜんげん この の賢をねたまず、人の善言をきくを好み、ひとの美ぎよう しよう この 行を称することを好み、古今の経籍にかきしるわけん ひどすじ けいしゆう いちげんいちぎよう せる話言といへば、一筋に敬修して一言一行なひび ひと まな きき これ きよう よう りとも、日々に人に学び聞て、是を今日の用にたおも ところ ひと てむと思ふ心のある人ならば、師傅の位を授そうろう がい 候ても害なかるべし。

それで、その先生が人間性が豊かであっても、ひろく種々の学問に通じていなければ、さとし教える道は行きわたらない。その先生が種々の学問に通じていても、人間性が豊かでなければ、まじめで行き届いたまごころは薄いものである。だから、この両方を備えた人を、完全に仕上げる先生としなければならぬ。

ただし、学問と徳行を兼ね備えた人格者は、どこにでもいるわけではない。まず、性格がおだやかで正直な人で、他人のすぐれているところをねたむようなことがなく、他人のよい話を聞くことが好きで、他人のよいおこないをほめたたえることが好きで、昔から今日に至るまでの古典に書きのこされた話であるなら、ただただ敬い修めて、ひとことでも一行でも、毎日他人から学び、それを、今日の役にたてようと思う心持ちの人であるならば、先生の資格を与えても、害はない。

りりこうはつめいはつめい、とりまわ
利口とりまわ發明に取廻して、是これに似て非なる人ひとを此任これにんに
すうれば、善人ぜんにんは日々ひびにうとく、弁倭べんねいは日々ひびにす
すみて、世子せいしの言行げんこうを破やぶることふせぎとどむべか
らず、尤もつともおそ恐るべきこと也なり。つまる所ところは師傳しふの官かん
に任にんずる人ひとは、つとめて学問がくもんをすべきことなり。

賢く動き回って、ちょっと見たかぎりでは似ているが、
実際は全く違うような人を任命すれば、善人からは時がた
つほど遠くなり、口先だけの心のねじれた性格が時がたつ
ほど強くなって、世継ぎが口で言うことと実際におこなう
ことが違っていても、それを止めることができなくなるの
で、もつとも恐れることである。要するに、先生となる人
は、できるだけ努力をして学問をすることである。

○六経より以下、諸書に人君の教戒を述たることりつけいと備らざる所なし。但し世子を教るの術をまとめて手近くみるべきは、国語の楚語に申叔時といへる人、世子の教かたを説たることひと念頃也。せいし おしえ ねんころなり
漢書の賈誼が伝の治安の策の中に親切に論じたり。この二通りをよくよく読ふたとおてみるべし。よみ
まづ世子をそだつる道は、第一に孝悌の徳をいざなふべきこと也。なり

○六経〔儒教で貴ぶ六種の經典。すなわち「易経（えききょう）」「書経（しよきょう）」「詩経（しきょう）」「春秋」「礼記（らいき）」「楽経（がくけい）」。のち「楽経」が亡んだので、かわりに「周礼（しゅらい）」を加えて六経という。〕をはじめ諸書に、君主たるものの教えいましめることが述べられていないものはない。

ただし、世継ぎの教え方をまとめて手早くみるのには、『国語』の「楚語」のなかに、申叔時という人が、お世継ぎの教育をどのようにすべきかを事細かに説いている。

『漢書』の「賈誼の伝」の「治安の策」なかにおいても親切に論じられている。このふたつを、よく読まなければいけない。まず、世継ぎを育てる道は、第一に父母に孝行で、目上の人によくしたがう、といったすぐれた品性を、そなえるように導くことである。

尊貴そんきの上うへにては親子おやこの間あいだも疎遠そえんなるものにて、素そ賤せんの人のやうに二六時中にろくじちゆうに顔かおと顔かおをも合せざるものなれば、親愛しんあいの情じようも自然しぜんと下々しもじものやうにはこまやかならぬもの也なり。此処このところをよく心得こころえて、とにかくに御親子おんおやこの間あいだの相互そうごになつかしくなり給ふやうにと、心得こころえとりかひ可申もうすべしこと也なり。これ孝悌かうていの徳とくを長ちようずるもとなり。下々しもじもの上うへにてだに成人せいじんいたし、妻子さいしをも持候もちそうろうとき時にいたれば、父母ふぼの膝ひざの廻りまわにをりし時ときのやうには親愛しんあいの心こころもなくなりて、幼年ようねんにてきとくに見みへ候そうろうこ子こも、孝行者かうこうものといはるるほどには、つひに得えならぬもの也なり。

極めて貴いお方においては、親子も遠ざかって関係が薄いものでして、庶民のように一日中顔と顔をあわせるということもありませんので、親しみと愛情も下々の者のようにはこまやかではありません。

このところをよく心得て、とにかく親子が互いに心がひかれて離れがたくなるやうにと心得て、取り回すやうにしなければなりません。

これが、父母に孝行で、目上の人によくしたがうといつたすぐれた品性を伸ばす基本となる。

下々の者でさえ、成人して妻子をもつやうになれば、父母の膝のまわりにいたころのような親しみと愛情もなくなってしまう、幼いときにはほめたたえるやうな子であつても、孝行者といわれるやうな人物には、しまいにはならないものである。

まして貴人きじんの上うえにては、成人せいじんし給たまふに随したがひ、御おたがいれいせつの礼節れいせつもおごそかなるものなれば、御幼年ごようねんの時ときより、うとうとしく育そだち給たまへば、のちのちは礼義れいぎばかりになりて、恩愛おんあいの情じょうはいつとなく絶たえはつるやうになり給たまふも多おほくあること也なり。
次つぎには驕傲きょうごうの心こころ吝嗇しんしゃくの氣きに長ちようじ給たまはぬやうに、人ひとを恕ゆるし給たまふ心こころを專もつばらにそだて奉たてまつるべきこと也なり。孔子こうしも周公しゅうこうの才さいの美びありとも、驕りおごりかつ吝けちならば、其その余よは見るにもたらずと仰おほせられし。

まして、貴いお方の子においては、成人するに従い、親子の礼節も重々しく近寄りたいたいものになってしまふので、幼いときよりよそよそしく育てば、のちのちは礼儀ばかりになってしまい、いつくしみの心が、いつともなくなつてしまわれることは、よくあることです。

次には、おごり高ぶる心や、ひどく物おしみをする気持ちが大きくなれないように、相手を思いやる心をひたすらに育てられるようになされることである。

孔子も、「周公の才能は立派なものであるが、おごり高ぶり、かつ、けちであるのならば、そのほかのことは何も見るべきものはない。」と、おっしゃっています。

驕傲きょうごうとは、気きも心こころもうはもりて、人ひとをあなどり
かるしめ、すべてなりのものを目下めしたにのみ見給みたまふやうに
なること也。吝嗇りんしやくとは、財宝ざいほうをむさぼり、物ものをし
わく、をしみ給たまふこと也。なり
不孝ふこうの心こころは親子おやこの間あいだ疎濶そかつなるより生しょうじ、驕傲きょうごう
の心こころはあたりきづかに氣遣たまひし給ひとふ人のなきより生しょうじ、
吝嗇りんしやくの心こころは義理ぎりをつとめ給たまふことを教おしへざるよ
り生しょうず。みなみなことごとく習慣しゅうかんせしむる所ところな
り。

おごり高ぶるとは、気持ちも心ものぼせて、人を軽く見
てばかにし、すべてのものを見下すのみになられることで
ある。物おしみをすると、財産や宝物をどれだけでもほ
しがり、ものを出しおしみされることである。

親不孝の心は、親子の間が離れていることからおこり、
おごり高ぶる心は、まわりに氣遣いをされる人がいないこ
とから生まれ、ひどく物おしみをすると、他人に対して
務めたり報いたりされなければならないことを教えないこ
とから生まれるものである。

そうならないように、これらすべてどんなことでも習慣
となるようにすることである。

○孝愛の情を厚くせんとならば、朝夕に御膝元へしたしく参り給ひて機嫌をきき給ふやうにすべし。驕傲の心をおさへんとならば、近習の臣、相互に恭遜にして師傅を尊敬して見せ奉るべし。吝嗇の心をおさへんとならば、相互に義理を つとめて見せ奉るべし。

○敬愛のまごころをもって父母に仕える気持ち強いものにしようとすれば、常々両親のところへ自分からお越しになって、安否やようすをうかがわれるようにしなければいけません。

おごり高ぶる心を、おさえようとすれば、身近に仕える者どもが同じように慎み深く従って、先生を尊敬していることを見せて差し上げなければなりません。

物おしみをする心持ちにしないようにするには、身近に仕える者どもが、同じように物事の正しい筋道に努めていることを見せて差し上げなければなりません。

恭遜きようそんとは、かりにも互たがいにいんぎんにつきあうて、
ものいひ挨拶あいさつもしとやかに美うつくしく、かりそめにも
あなどりかろしめ候そうろういろなく、人ひとをたてて我がを
はらず、あらしもとるふりを見せみ申もうすまじきこと
也。なり

慎み深く従うとは、十分ではないにしても、お互いにま
ごころをこめて礼儀正しくつきあって、言葉づかいやあい
さつを慎み深く美しくして、一時的であっても、人を軽く
みてばかにして見下すようなことがなく、相手の人を尊重
して自分の考えだけを押し通さず、争いあってゆがめるよ
うな振りを見せないようにすることである。

もしあやまりて角^{かど}たちたる体^{てい}をする人^{ひと}ある時は、
師傅^{しふ}の人^{ひと}これをいましめて、きはいはぬものぞ、か
くはせぬものぞとおとなしくしかり教^{おし}へて、それを
見^みせ奉^{たてまつ}るべし。義理^{ぎり}をつとむとは、たとへて申^{もう}さ
ば、何^{なに}にても被^{くだされ}下^{せう}候^{こう}時は、食物^{たべもの}はうまく大^{おお}きな
るを仲間^{なかま}傍^{ほう}輩^{ばい}へも、わかちあたへ、物品^{ぶつぴん}はよきか
た見事^{みごと}なるを傍^{かたわら}なる人^{ひと}にも、わかちあたへ、我^{われ}は
あしきかたをありがたく頂戴^{ちやうだい}して、義理^{ぎり}を専^{もっぱら}に
して欲得^{よくとく}を第一^{だいいち}にせぬふりを見^みせ奉^{たてまつ}るべし。

もしも誤^{あや}って、やりかたがおだやかでないようなことを
する人がいたら、先生^{せんせい}が注意^{ちゆうい}をして、そうは言^いわない、こ
うはしないと、おとなしくしかって教^{おし}えて、それを見^みせて
差^さし上げなければなりません。

物事^{ぶつじ}の正^{ただ}しい筋道^{すじみち}を努^{つと}めるとは、たとえて言う^いと、どの
ようなものでもくださったときには、食^くべ物^{もの}であるなら、
おいしくて大きなものを、仲間^{なかま}や同輩^{どうばい}のものへも分かち与^よ
える。物品^{ぶつぴん}であるなら、よくていいものを、そばの人^{ひと}にも
分かち与^よえる。そして、みずからは、あまりよくないほう
をありがたくいただく。このように物事^{ぶつじ}の正^{ただ}しい筋道^{すじみち}をた
だただ努^{つと}めて、ほしがって手^てに入れようとすることを大事^{だいじ}
なことのようにしないすがたを見^みせて差^さし上げなければな
りません。

御手遊、御手習、道具筆墨紙とても、取をさむるときは、人々に被下候時よこれ損じ候ては悪しく、夫故に大事にいたし候段を常々をしへ奉り、衣類調度なども君の為とてはをしまし、のちのち人へ拝領の為にとて、疎末にし給はざるやうにといふところを、かりそめにも見せ聞せ奉るべし。

此心を長じ給へば、人の君となり給ひては御自身身のうへを儉約し給ひて下を恵み給ふものといふ習ひ癖になり給ふことなり。君上の徳は、恭儉になつかぬ人もなし。

遊び道具、手習いの書、道具類、筆、墨、紙であっても、取り扱うときには、それを人々に下されるときに、よごれてこわれていたのでは悪いことなので、いつも大事に使うようにすることを、常々教えて差し上げて、衣類や調度類についても、お殿様だけのものであるとっておしむようなことをせず、いずれは人に差し下すためのものであるからと、粗末に取り扱われることのないようにということをし、ちよつとしたことであつてもお見せしお聞かせして差し上げなければなりません。

そうした心持ちが成長してゆけば、人々の君主となられたときには、自らの身の回りのことは儉約なされて、領民を恵むという習慣になられることでしょう。君主の品格において、人に対してはうやうやしく、自分自身は慎み深く振る舞うことに、誰もなれ親しまない人はいない。

驕傲きょうごうをうとまぬものもなく、爽利そうりをよるこび、
吝嗇りんしやくをさげすみ奉たてまつらぬ人もなし。人心じんしんのなつき
たてまつ 奉たてまつるは、家か国こく繁はん栄えいの元もと、人じん心しんのはなれ奉たてまつるは、
かこくすいび 尤もつともだいじ大事だいじなること也。
家か国こく衰すい微ゐのもとひなれば、
もくぜん ついえ 目前もくぜんの費つゐえをいとひ、やぶさかなる心こころを持もたせ奉たてまつ
れば、儉約けんやくとはあたへめぐむものをもあたへめぐ
まず、きたなく、しわくして、只ただ金銀きんぎんの山やまをのみ
つみたま 積給こころえたまふこととのみ心得こころえたま給ふことになりて、仁恕じんじよの
こころ うしな 心こころを失うしなひ給たまふものなり。

おごり高ぶることをきらって遠ざけない人もおらず、さわやかで賢いことを喜び、物おしみを見下すことをされない人もありません。

人々の心が、君主になれ親しまれることは、国家繁栄の元であり、人々の心が、離れていつてしまわれることは、国家衰退の原因ですから、そのようにされることが、最も大事なことです。

目の前のことで必要な経費をきらって使わず、思い切りの悪い心を持たせられたならば、「儉約」とは、与えなければならぬものも与えて恵まず、意地きたなく、出しおしみをして、ただただ金銀の山を積まれるだけのこと（蓄財すればいいこと）であると心得られて、仁恕の心を失ってしまわれるのである。

仁じんとは御身おんみのうへはともかくもになされ候そうろうて、
人のうへをあはれみ、苦世話くぜわに持給もちたまふことなり。
恕じよとはものごとにおもひやりふかく、人見ひとみずなる身み
勝手がってをし給たまはざることなり。いにしへの明王賢君めいおうけんくん
の自己じこの身を節儉せっけんにして、下の恵したをあつくし給たまひ
しことは、書籍しよせきにも数々かずかずかきしるして、人もよく
しりたること也なり。

仁とは、自分の身の上のことはともかくにされて、人々
の身の上のことをかわいそうに思つて、苦勞して（ほねを
おつて）世話をされることを身につけておられることです。
恕とは、ものごとすべてに思いやりがふかく、人のこと
を考えない身勝手なことをされないことである。
むかしのすぐれた賢い王や賢明な君主が、自分の身の回
りのことは節約儉約して、庶民への恵みを手厚くされたこ
とは、書物にもいろいろ書き残されており、人々もよく知
っていることである。

ちかき比青山故大膳亮殿は生得質素なる人にて、
ころあおやまこだいぜんのすけどの せいとくしつそ ひと
よそめにはしわき人のやうに見え候ひしが、或時
そと せいろう やくにんども めしだ あるとき
外よりかへられ候て、役人共を召出し、誰彼の
たく まい げんかん み てびろ だれかれ
宅へ参り、玄関を見れば手広くて自由もよくみへ
そうろう じぶんやしきげんかん ほか せいろうあいだ
候。自分屋敷玄関はことの外せばく候間、
いっけんとお おも なり
いま一間通りひろげたく思ふ也。

この時代になってからのことですが、尼崎藩主であった
青山大膳亮（幸秀）殿は、もともと質素な人で、はために
はけちな人のように見受けられたが、あるとき、外出から
帰られてから役人どもを呼び寄せて、だれそれのお屋敷へ
伺ったところ、玄関をみると、広くて使い勝手がよさそう
であった。自分のところの玄関はとても狭いので、一間ほ
ど広げたいと思われた。

大工共に入用を積らせ候て、見せ候やうにと
だいくども いりよう つも そうろう み そうろう
 申付られしに、役人ども常々しわき氣風を存じ
もうしつけ やくにん つねづね きふう ぞん
 候故に、随分下直につもらせ、金八両にて出来
そうろうゆえ ずいぶんしたね きんはちりょう でき
 候由を書つけ差出せしを、大膳殿つくづく見ら
そうろう かき さしだ たいせんどの み
 れ候て、いやいや無用に致すべし。八両と申
そうろう むよう いた はちりょう もうす
 金子にては足輕一人を扶助することぞ、とて普請
きんす あしがるひとり ふじよ ふしん
 をやめられ候よし。
そうろう
 然るに尼が崎居城の節、大坂の御城失火につき、
しか あま さききよじょう せつ おおさか おしろしつか
 江戸へ早追の使者を以て注進申され候時、両
えど はやおい ししや もつ ちゆうしんもう そうろうとき りょう
 人の使者を目通り近くよび出し、膝の側に小粒金
にん ししや めどお ちかか ひざ そば こつぶきん
 を紙にもりおきて両の手にすくひて、定めて手当
かみ りょう て さだ てあて
 は役人共より申付候はん。
やくにんども もうしつけそうら

それで、大工に費用を見積もらせて、見せるようにと申
 し付けられのだが、役人どもは、つねづねけちな性格を知
 っていたので、とても安値に見積もらせて金八両でできる
 旨の見積書を差し出したところ、大膳殿は、それをじつく
 りと見られて、「いやいや、やはり無用のこと。」と言われ
 た。「八両あれば、足輕を一人召抱えることができるのだから。」
 と言われて、普請することを取りやめられた。
 それなのに、尼崎のお城におられるときに、大坂城が失
 火したので、江戸へ早駆けの使者をもって知らせるときに、
 二人の使者を目の前に呼び寄せて、膝のそばに小粒金（一
 分金（いちぶきん）の俗称。長方形で、四枚で小判一枚（一
 両）と換えた）を盛ったのを置いて、両手ですくって、「手
 当ては役人どもからすでに手配されているであろう。」

これ じぶん
 是は自分がやるぞとて、其もの右の袖へ自身入
 らる。

つかい おとこへいふく しりぞ

使の男平伏して退かんと致し候へば、まてま

もう そうろう またりようて ひと

てと申され候て、又両手に一すくひ左の袖へ

そうろう そうろう りようになん どうよう よん たまわ

いれられ候よし。 両人へ同様に四すくひ給

そうろうにつき りようになん ひとしおかたじけなくぞん

り候付、両人も一入 忝存じ、道中もは

そうろう えど ちゆうしんいちばん ちやく

げみ候て、江戸への注進壺番に着いたし、

そのごたいせんのさんぶ せつ きぼ じようい これありそうろう

其後大膳殿参府の節、規模なる上意も有之候

かつまた くだんげんかん おきつけ ながもち

よし。且又不断玄関に置付の長持ひとつあり。内

きんせんりよう きん じよう ふういん

に金千両はだか金にていれおかれ、鎖まへ封印

どうばん ひろまばんかわ あい じぶん ふた

もなく、当番の広間番代り合の時分、蓋をあけ、

そうろう うけどり ことすみそうろう うけたまわ

み候までにて、受取わたし事済候よし 承

つた そうろう

り伝へ候。

これは自分が特別に差し下すものである。」といって、使
 者の右の袖に自ら入れられた。

使者の男が、お辞儀をして退出しようとする、 「まて
 まて」と言われて、また、両手ですくって左の袖に入れら
 れたとのこと。

このようにして、二人の使者へ四すくいを与えられたの
 で、使者のものは、とてもありがたいと思って、道中も励ん
 で、江戸への注進が一番早かったので、その後、大膳殿が
 江戸出府のときに、手本であるとの上意（将軍のおほめ）
 があったという。

そのうえまた、平生も玄関に置かれたままの長持ちがひ
 とつあった。その中には、千両ものお金がはだかで置かれ
 ており、鍵も封印もされずに、当番の広間番の役人が交代
 するときには、ふたを開けて見てみるだけで、勤務の交代
 をしていたと聞き伝えられている。

君上の心持は此所をよくよく心得候て、を

しへ奉るべきことなり。

○はじめにも申し如く、人の性は幼壮老の三時に順

ひ教戒あることなれば、幼少の君へはまづ幼

少の時につれて、習慣を熟させ可申こと也。

すでに一人だち、是非のわきまへもしり給ふ時に

は、又其時の心得にてならはし奉るべきこと也。

併いやしき諺にも三つ子のたましひ百までと

申せば、御幼年也とてなほざりにはすまじきこと

也。

君主の心持ちは、こうしたことを、よくよく心得て教育して差し上げなければなりません。

○はじめにもお話しましたように、人の性質は、幼年期、壮年期、老年期の三段階に従って、教え戒めることがあるので、幼少の若君には、まず幼少期における習慣を習熟させることです。そして、一人前になって、分別がわかるようになったら、またそのときの心得によって、習わせるようにして差し上げなければなりません。

しかし、世間のことわざにも「三つ子の魂百まで（幼いときの性質や培った習慣は、老人になっても変わらないというたとえ）」というように、御幼年だからといってなおざりにしてはいけません。

但し勁草堅木も実生苗木の時はなべてやはらかなるものなれば、大木のかげならでは風雨をしのぎ成木すべき道理なし。故に師傅の人は幼少をいつくしみ、あはれむ心を第一にして、大木のかげになり、ひなたになりて、風雨をささへ、其かげに苗木の成長する所を片時もわするまじきこと也。

とにかくに習はぬ経はよまれずといへる世話の通り、古今の教訓に通じ不申候ては、師傅の忠を尽さんとしても行届ざることも多かるべし。

ただし、強い草、堅い木であっても、芽が出たとき、苗木のときは、みな柔らかいものなので、大木の陰でなければ風雨をしのいで、成長する道理はない。

ゆえに、先生の立場にある人は、幼少の者をいつくしみ、あわれむ心を最も大切にして、大木のように陰になり、日なたになって、風雨をふせぎ、その陰で苗木が成長することを、少しのあいだも忘れてはいけないのである。

とにかく、「習わぬ経は読まれず」「習ってもいないお経を読めといわれても読めないように、知らないことをいくらやれといわれてもできない。」という世間の話にもあるように、昔から今にいたる教訓に通じていなければ、先生としてのまごころからの世話をつくそうとしても、行き届かないことが多い。

しからは先道せんどうを学まなぶべきこと、師傳しふの要務ようむなり。
学問がくもんといへばとて、朝あさより夕ゆうまで机つくえのうへに書籍しよせき
をひらき、眼めをさらすのみにあらず。昼夜ちゆうやの間に
は一時半時いっときはんときのいとまは誰だれもあるもの也なり。其そのひまひ
まをつとめて要文ようぶんを一行いちぎよう二行にぎようにても誦習よみならいして、
この言葉ことばはかくこそ、その文言もんごんはかくこそと心こころに
思おもひひそめて、是これを日々ひびの言行げんこうにつとめて、世子せいしを
教おしえるたねとせば、詩書ししよつげい六経もうすは申およに及およばず、草紙そうし
物語ものがたりのうちにもいくらかも教おしえのたねとなることは
あるもの也なり。これ則すなわち学問がくもんなり。

だから、古くからの教おしえを学まなぶことが先生の立場にある
者の重要な任務しづむなのである。

学問だからといって、朝から晩まで机の上に本を開いて、
読むだけではない。一日のうちには、一時間、二時間のひ
まは誰にでもあるものである。その手のすいた時間のとき
に精を出して、重要なところを一行でも二行でもよく読ん
で、この言葉はこういう意味、この文句はこういう意味で
あるとよく考えて、心の中におさめて、毎日の暮らしのな
かで、言うことと実際におこなうことのなかに生かして、
世継ぎを教育する種とするならば、詩書〔詩経と書経。四
書ならば、『大学』『中庸』『論語』『孟子』〕や六経〔『易経』
『書経』『詩経』『礼記』『楽経』『春秋』〕はいうまでもなく、
草紙〔絵入りの通俗的な読み物〕や物語のなかにもいくら
でも教えることの種となることがあるものである。これが
学問である。

べつ おきな 別して幼くおはしまし候 そうろうおかた 御方には、むかしいま
ものがたり おほ の物語のうち、人君の有がたき じんくん 言行などを、弘 ひろ
く おほ 覚え居てはなし聞せ きか 奉ること、尤 もつとももつ 以て利益 りえき
の道なり。 みち

わけても、幼いお方には、昔や今の物語から、君主とし
ての有益な話やおこないを幅広く覚えておいて、お話して
差し上げることは、とても有益な方法である。

ひとのちゆうをどうにこたえる
対人之問忠

忠とは何かとの問いについて答える

しんか ごと みぶん なに ちゆうふちゆう さかい
 臣下の御身分にては何よりまづ忠不忠の境を
 とく おわきまえなされたく おこころづきそうろうに
 篤と御弁被成度と御心付候つき、右の境
 ごと てんまい そうろうよう もうしのべるべきむね ごしんせつ
 とくと御合点参り候様に可申述旨、御深切の
 おんことまずもってかんしんいたしそうろう
 御事先以致感心候。
 ちゆうしん しょぎよう とき したが こと いちがい
 忠臣の所行は時に随ひ事にのぞみ、一概には
 むつかしくもうすこと ぞんじそうろう しかしながらいつたい こころもち まず
 難申事と存候。乍併一体の心持は先
 こころえもうしたきこと そうろう
 心得申度事に候。

家臣の身分にあつては、何よりもまず、忠（まごころをこめて、よくつとめを果たすこと）であるか、不忠であるかをよくわきまえなければいけないと気づいたのですが、そのことをよく理解できるようにお話しくささいと、思いやりをこめてのお尋ねに、まずもって感心いたしました。忠臣（まごころをこめて、よくつとめを果たす家臣）のおこないというのは、時と場によって違いますので、ひとくちに申し上げるのは難しいことです。でも、ひとつのまとまった心持ちとしては、まず心得ておきたいものでございます。

ちぎようかくしき そふだいだいつた うけ
知行格式は祖父代々伝へ受たるものとのみ心
えそうろう きみ こうおん いただ ともぞんせす

得候て、君の高恩を戴く共不存、ひたすらに

自己一分の利害をのみ存じ、忠敬の道を露いさ

さかも弁へ不存ものは、人の形にて人の心な

きものなれば、もとより是非善悪の沙汰に不及

候。

聊も君臣といふことを弁へ知りたる人よりぞ、

忠不忠の論には及べき事に候。

凡人臣たるものは身分の尊卑にもよらず、生得

の賢愚にもよらず、おのれ忠臣よと呼ばれたく存

候は人の天性にて、万人同情に御座候。

いただいている土地と家柄は、先祖代々伝えられてきた

ものであるとのみ心得て、それが君主の配慮による恩恵で

あるとも知らず、ひたすら自分自身の損得のみを考え、忠

実でつつしみ深くあるべき道理をすこしもわきまえない者

は、人のかたちはしているが、人としての心をもっていない

者なので、そんな人にはもともと、正しいことと正しく

ないこと、善いことと悪いことを論じるまでもございませ

ん。すこしでも君主と家臣について、わきまえて知ってい

る人であれば、忠、不忠の論議をすることができましよう。

およそ家臣たるものは、身分の高い低いによらず、生

まれつき賢いか愚かにもよらず、自らが忠臣と呼ばれた

いと思うのは、人の天性であって、すべての人が同じ思い

なのでございます。

しかれどもちゆうふちゆう みち あき えとくいたさずそうら
然共忠不忠の道を明らかに会得不致候へば、

こころいつ ちゆう いた ぞんじそうら
心一ぱい忠を致すと存候へども、いつしかと

ふちゆう しらずそうろう もつともくちおし し
不忠におちいることを不知候。尤口惜き次

第に候。

ちゆう もうすもじ くん
まづ忠と申文字はまめと訓じ、まめはまめやか

もうす こころ しんせつ いきとどくこと
と申こころにて、心いきの親切に行届事に

そうろう みいちぶんとうざぎり
候。かりにも如才なく、身一分当座切にことを

つとめ ひと こころ もうしそうろう
勤て、人みすなる心のなきことを申候。

しかしながら、忠、不忠の正しい筋道を明確に理解して

いなければ、心の限り忠をつくすと思つても、いつしか、

不忠におちいつてしまうことを知らないのをございます。

こういうことが、もつとも口惜しいのをございます。

まず、忠という文字は、「まめ」と読みます。「まめ」と

は「まめやか（まじめなさま。心がこもっているさま。ま

た、注意が行きとどいてるさま。）」という心で、心意気

が親切に行き届くことをございます。少しも、手抜かりが

なく、我が身をその場で心から勤めて、人を人と思わない

ような心のないことをいうのをございます。

君は上に一人立給ひて、臣は下に数十人、数百人、数千、君の大身小身に随ひ、臣の多少は有之候へども、いづれも下に立ならびて、一同に君の政事を手伝ひ、家国の安危を相談するものにて候。是を人の一身にたとへて、きみを元首と申候。

元首は頭にて候。臣を股肱耳目と申候。手と足と耳と目の事に候。股肱耳目の四をあけて、鼻口唇舌爪牙百骸はその中にこもり候。

君主は、上に一人のみ立って、家来はその下に数十人、数百人、数千人とおります。君主が大国であるか小国であるかによって、家来の数に多い少ないがありますが、すべて、君主の下にあつて、全員が君主の政治を手伝ひ、国家の安全や危険を相談する者でございませう。これを、人のからだにたとえて、君主を元首（くびもと＝頭）というのでございませう。

元首は、頭でございませう。家来は、股肱耳目といひませう。主君の手と足と耳と目のことでございませう。手と足と耳と目の四つを広げて、鼻、口、唇、舌、爪、歯、からだにもっている多くの骨は、そのなかにおさまっているのでございませう。

目は見、耳は聞、手はつかみ、足はあゆみ、口は
 くらひ、鼻はかぎ、唇舌爪牙百骸、上下左右に
 動き働きて、一身の主たる頭に随ふありさま、
 一人の君に下群臣の奉公をするに、ことなる事
 無之候。

四支百骸の頭に随ひ動くこと、誠に如才もな
 くまめやかなるものに候。手つかまんとすれば
 足すすみ、目がみるうちに耳がきき、相互に思ひ合
 たすけ合て、一身をかいはうすること、いはんか
 たなく候故に古より賢明の君上にいまして、
 忠良の臣、下に立ならぶ代は、たとへば一身
 達者無病なるものの起居運動すくやかに立廻り
 て、まめまめしきがごとくに候。

耳は聞き、手はつかみ、足は歩み、口は食べ、鼻はお
 いをかぎ、唇、舌、爪、歯といった多くの骨が、上下左右
 に動いて働いて、そのからだの主体である頭に従うようす
 は、一人の君主のもとにいる多くの家来が、一身をささげ
 て働くことと同じでございませう。

両手両足をはじめ多くの骨が、頭に従って動くことは、
 実に手抜きなく行き届いているものでございませう。手が
 つかもうとすると、足が動き、目が見ているうちに耳が聞
 いており、それぞれが助け合って、からだのめんどうをみ
 ていること（介抱）は、なんともいいようがないことでは
 ない、昔より、賢明な君主がおられて、忠義で善良な家来
 がその下に立ち並ぶ治世は、たとえば、からだは元気で病
 気もなく立ち居振る舞いがしっかりして、よく働くのと
 同じでございませう。

て 手は足のすすむかたに向ひ、足は手の向ふかたに
 はしり、打も捉もたつもをるも思ひ合て動き働き、
 じもくこうぜつ 欲する所のままに候。是を富強
 耳目口舌、安樂なるありがたき御代とは申候。
 あんらく 安樂なるありがたき御代とは申候。
 また暗愚の君上にいまして、不忠の臣、下に立
 ならぶ時は、たとへば一身虚弱多病なるもの
 起居運動すくやかならず、立廻りもぶせうなるが
 ききようんどう 起居運動すくやかならず、立廻りもぶせうなるが
 ごとくに候。手つかまんとすれども足すすまず、
 あし 足はあゆめ共手がきかず、たつもをるも心まな
 どもて らず、耳目口舌欲する所のままならず、是により
 じもくこうぜつほつ 困乱衰弊なる国となり、浅ましき代とは申こと
 くに 候。
 あさき 浅ましき代とは申こと
 よ 申こと
 もうす

手は足の進む方に動き、足は手の向かう方に動き、打っ
 たり、持ったりするときに手足が一緒になって動いて働き、
 耳や目や口も思うままになります。こうした状態を、国が
 富んで強く、おだやかで満ち足りたありがたい世の中とい
 うのでございます。

また、おろかな君主の下に忠実でない家臣が居並ぶよう
 なときは、たとえば、体が虚弱で病気が多いといったよう
 なことで、立つことすわることがしつかりせず、動作もめ
 んどうくさがる（無精）ようなことでございます。

手でつかもうとしても足が動かず、足が進もうとしても
 手が動かず、立つこともすわること、思いのままになら
 ず、耳や目や口も思うままにならず、これによって乱れて、
 風俗が衰えて悪い国になって、あさましい世の中になって
 しまうのでございます。

いっしん てあし 一身は手足のまめなるを以て無病と称し手足の
まめならぬを以て多病と称す。国家は群臣の思
ひあふを以て富强をなし、思ひ思ひなるを以て
衰弱をまねく。誠に忠なる人は何卒己が君を
古の聖の君にもならひ給ふやうにし奉りた
く存候は不及申事に候。然ば人我相互
に思ひ合て手足耳目の一身に随ふ如く、ねぢれ
もとる心なく、左右上下一同に心力を合せ
政を手伝ひ奉るべき事候。是全く身
一分の利害をすてて、至極公忠なる心なくては
相ならざるわざに候。

自分の体は、手足が健全であることによって無病といい、
手足がままならないと多病といえます。国家は、多くの家
臣が考えを一致させることによって、富んで強くなり、め
いめいが思うままであることによっておとろえて弱くなり
ます。

本当にまめまめしい人は、どうか自分の仕える君主を、
おかしの聖人のような君主にもなられるようにと差し上げ
たくなることは、いうまでもないことでございます。

それならば、人も自分もお互いに思い合って、手、足、
耳、目が自分のからだに従うように、ひねってゆがんだ心
持ちがなく、同僚も上司も部下も一緒になって心を合わせ
て、政治の手伝いをして差し上げることでございます。こ
れは、すべて自分自身の利害を捨てて、このうえなく公
対するまごころがなければできないことでございます。

ひとわれたがい わ まんしん
人我互に我が慢心をさしはさみ、忠勤は仕
がち ころろえ に ちゆう はなはだ
勝と心得たるは忠に似て不忠の甚しきにて
そうろう これすなわちて ころろえ
候。是則手はつかむ役とばかり心得て、足の
いたみをなでさするも手の役と申ことをしらず、
あしはありく役とばかり心得て、手の廻らぬ時は
け ふ もうす ある おな いっしん
蹴る踏むと申わざの有ことをしらず、同じ一身に
つきながら、左右上下すぢりちがひて、つまる所
いっしん ふじゆう てあし もうす
は一身の不自由におちて、用にたたぬ手足と申も
のにて、君のためにはかやうなる人を不忠不令の
しん もうしそうろう
臣と申候。

人と自分がお互いにおごりたかぶっておりながら、まめに勤めていると心得ているようなことは、誠実そうにみえて、実は不誠実きわまりないことでございます。

このようなことは、手はつかむだけのものであるのみ心得て、足の痛いところをなでさするのも手の役目であることを知らず、足は歩くだけのものであるのみ心得て、手が回らぬようなときには、けったりふんだりすることもできることを知らずに、同じ自分のからだなのに左右上下にねじりくねらせて、結局は、不自由におちいって、役に立たない手足になってしまうようなもので、君主のためには、このような人は不誠実で命令にそむく家臣であるというのでございます。

たとへていはば金奉行の金銀をしみ、蔵奉行の米穀をしみ、諸払役諸渡役の払ひ残のな
く渡かたの滞らぬやうと存候は職分の当
りまへにて、忠にても不忠にても無之候。
公忠の場を明らかに弁へ候はば、金奉行も不
肖をして存慮より多くも出すべし。諸払役も
不肖をして存慮よりひかへて払ふべし。
作事奉行は普請の出来ばへをこのめども金方の
出の多きをいたはりて、己が手際を十分にせず。

たとえていうならば、金奉行が金銀を大事にし、蔵奉行がお米を大事にし、諸支払い役が払い残しないように、渡すべきものがとどこおらないように渡されるのは、職務として当たり前のことであつて、こんなことは、忠（まごころをこめて、よくつとめを果たすこと）とか不忠に関わることではございません。

公の場における忠というものを明確に理解しておれば、金奉行も決まりに関わらず、自分の裁量で多くをだすはずです。諸支払い役も決まりに関わらず、自分の判断で準備をして支払いをするはずで

作事奉行（建物の造営、修繕などをおこなった）は、その出来ばえの良さを喜ぶのですが、そのために支出が多くなるように心がけて、自分のやり方を完全なものにしないようにする。

勘定奉行は收納皆済をこのめ共、諸代官の
百姓へあたりのつよくなる所をきのどくに存
候て、皆済の御誉をかすがぬやうにと、相互に
思ひ合て、我ひとり忠臣とはならず、人も我も不
忠ものにならぬやうにところがくる。是を公正
忠良の臣と称して、家国の至宝と致し候事
に候。

勘定奉行（財政及び農民の行政、訴訟を担当した）は、
年貢の收納がすべてすむことを喜ぶのですが、徴収にあた
る代官が百姓に強くあたるといったようなことは、百姓を
気の毒に思つて、年貢徴収の手柄を得ようとせず、お互
いのことを思いやつて、自分のみが忠臣（まごころをこめ
て、よくつとめを果たす家臣）になるといったようなこと
がないように、逆にそのほかの者も自分も不忠者にならな
いようにと心がける。これを、公正で忠良（忠義の心厚く
善良なである）な家臣といつて、こうした者を国家のこの
うえない貴重な宝とすることです。

己おのが一官いっかんの功こうを立たてんと存候ぞんじそろうとき時は、他役所たやくしよの
迷惑めいわくはかへり見みられぬ事故ことゆえに、一分いちぶんの功こうはここ
に立たてとも、多分たぶんの功こうはかしこにて損そんするなれば、
忠ちゆうといふものにあらず。一人ひとりの君きみに對し奉りて
は莫大ばくだいの不忠ふちゆうにて候。家國かこくの上うえを存ぞんじ四面上しめんじやう
下行げゆきとどく心こころなきより出候いでそろうこと事ことにて、古今ここんともに
かやうの類たぐいを姦邪かんじやの臣しんと名づけ申候もうしそろう。実忠じつちゆう
は目前もくぜんの小功しょうこうを見みず、家國かこく永久えいきゆうの謀はかりごとを專もつばら
として、自己じこひとり一人てがらの手柄てがらをかせがず、万人ばんにんのつと
めをたすけ、はげますを君子くんしの大忠だいちゆうとは申候もうしそろう。

自分だけが功績をあげようと思うときは、他の部署のめ
いわくをかえりみないので、ささやかな功績をあげること
はできるが、結局、大きな功績はあげられずに損をするこ
となので、これは忠ではない。君主に対しては、極めて大
きな不忠である。

これは、国家のことを考えずに周り全体に行き届く心を
持っていないことから生じるのであって、むかしもいまも、
こうした者を姦邪の臣（よこしまな家臣）と名づけており
ます。実のある忠臣は、目の前の小さな功績を目指さず、
国家悠久の計画を一途に考え、自分一人の手柄を考えずに、
万人の勤めを手助けして励ましますが、その者を、まごこ
ろをこめて、よくつとめを果たす、というのでございます。

戦場に赴く士は一己一己手柄をかせぐ心なく
候ては敵に勝べき道理は無之候。それすら一
己きりの手柄をのみ専にかせぎ候時は、
他組にて十人討死はするとも、我組にて三人
功名をすればよしと存候時は、千騎も百騎
同様にて軍の負は大将一人の難儀と相成候。
常々見もしらぬ疎遠なる朋輩にても、手詰の場に
ては肉親兄弟の如く助太刀介打をいたせばこそ、
味方の勝利とはなるなれ。大将壺人への奉公是
に過たる忠は無之候故に、軍令にはぬけがけ
の功名をかたく禁じ候て、第一の越度に申付
候事に候。

戦場に行く兵士は、自分自身が手柄を立てる気持ちがないければ、敵に勝つわけがありません。そうではあっても、自分のみの手柄ばかりをあげられていたとき、ほかの隊で十人討ち死にしても、自分の隊で三人が手柄をあげればいと思っておられるときは、千騎いても百騎いても同じことであって、軍隊が負けたときには、ただ大将一人が悪者となるのでございます。

見知らぬ縁のない兵士であっても、戦場では肉親や兄弟のように助け合って戦うから、勝つのです。大将に対するこれ以上のまごころをこめて、つとめを果たすことはございませんので、軍の規律には自分一人が手柄を立てようとするのを禁止し、最もしてはいけないこととしているのでございます。

ひとり てがら 一人の手柄をむさぼりて味方の勝敗をかへり見 み

ぬ不忠ゆゑに、和漢古今一同に重きおきてとはい わかんここんいちどう おも

たし候事に候。 そうろうこと そうろう

昔楚国の執政子文と申 むかしそこく しっせいしぶん もうしそうろうひと さんど 候人、三度まで執政に しっせい

なり候へども、そのたびたびに、さのみ嬉しと存 うれ ぞんじ

候 そうろうかおいろ 顔色もなく、又三度まで執政をめし放れ候 またさんど しっせい はな そうら

へども、其時々うらめしと存 そのときどき ぞんじそうろうかおいろ 顔色もなく、自 じ

分の勤の内に宜しかりしことも、あしかりしこと ぶん つとめ うち よろ

も、跡役の心得になるべきことはこまかに申送 あとやく ころろえ もうしおく

りて、つつみかくす心無之候。 ころろこれなくそうろう

これは、自分一人のみの手柄を欲しがって、味方の勝ち負けを考えない不忠なことであるから、わが国においても中国においてもむかしから今にいたるまで、重要な規律としているのでございます。

おかし、楚の国の家老で、子文という人がいましたが、三回も家老となられたのですが、そのたびにそれほどうれしと思う顔もされず、また三回も解職されたのですがそのたびにうらんだ顔をされることもなく、ただ自分の勤めにあつて、うまくいったこと、うまくいかなかったこと、すべてを、後に家老になる人の役に立つことは、詳細に申し伝えて、何も隠す心がございませんでした。

これ自身の利不利をわすれて、君の国家の為をの
み如才なく大切に存候。心故に、孔子も忠也
と称し給ひ候。

すべて人の交りは礼讓を第一と致し候。

礼讓とは、しきふかく人をそらさず、我よきには

こらず、人のよきをたつる事に候。人のよきを

よきに立る心だに有之候へば、人見ずなること

を致すべきやうなく、人みずなる所行だに

無之候へば、人と思ひ合事は不及申、物ごと

むつまじくゆきわたり候て、家国安富の相談も

成就致すことに候。

これは、自分自身の損得を考えずに、国家のためだけを
手抜きなく大事に考える心からのことでございますので、
孔子も、まごころをこめて、つとめを果たしたこと（忠）

ですよとおっしゃっておられます（『論語』「公冶長篇」）。

すべて、人の交わりというものは、礼讓（人間社会規範
と謙讓の精神）を最も大切にいたします。

礼讓というのは、心ゆたかで人を損なうことなく、自分
を誇らず、人の良いところを立てることでございます。こ
うした人の良いところを立てる気持ちさえあれば、人を人
とも思わないようなことをすることがなく、人を人とも思
わないようなことさえしなければ、人と人が思い合うこ
とができることはいまでもなく、ものごとが仲良くおこ
なわれまして、国家安泰の相談ごともなし遂げられます。

奉公をしのぎと心得候不忠のわざは、礼讓の心なきよりおこり候ことにて、家国の災はみな是より生じ候故に、孔子もよく礼讓を以て国をおさめば何かあらんとは被仰候。むかし齊の執政管仲と申人、礼義廉恥の四を四維となづけて、国を治るひかへ綱とさだめ候。この四のひかへ綱たゆむ時は、国則滅亡すと申候。礼は不踰節と申候て、人々身のほどほどを守りて、上をおかしのぐ心のなきことに候。

君主に仕えることを、ただこらえて通り抜けるといったように心得ているような不忠なおこないは、礼讓の心がないことから生まれることでございまして、国家の災難は、すべてこのことから発生しますので、孔子も、礼讓をもつて国を治めれば、困難があるだろうか（あるはずがない）、とおっしゃっておられます（『論語』「里仁篇」）。

おかし、齊の家老管仲という人は、礼、義、廉、恥の四つを四維と名付けて、国を治めるひかえ綱（倒れないように引張っておく綱）と定められました。この四つのひかえ綱がゆるむときは、国家が滅亡するときであるといわれました。

礼は、節度を超えず、といって、人々が身のほどをわきまえ、上の者にそむき、押しつける心がないこととござい

ます。

義ぎはみ不み自ず進からと申すす候ますて、上もうの引したてをそうまたろうず
自己じより立り身をつたくむやうなる所し行よのなきことぎ
に候そう。

廉れんはあく不を蔽お悪わと申わ候れて、我われあしことき事をおしかく
して、今日きを過よるやうなる、きもしき所し行よのなき
事ことに候そう。耻ちはお不う従に枉したと申が候わて、たとひ身みの
為たよめければとて、よこしまなるかたに心こをよせざ
るけなげなる所し行よを申候。

義は、自ら進まず、といって、上の者の引き立てを待つ
のではなく、自分から立身出世をたくらむようなおこない
がないこととございます。

廉（恥を知る）とは、悪をおおわず、といって、自分の
悪事を隠して、今日を過すようなあさましいおこないの
ないこととございます。

恥とは、よこしまな心に従わない、といって、たとえ自
分にとって都合がよくっても、よこしまな人には心をよせ
ないと、しっかり立ち向かうおこないとございます。

この四は人の所行第一のひかへ綱にて、是をとりがしては不参事に候。人の臣下たるもの此四のひかへ綱にだにはなれ不申候へば、自然と忠良の臣となりて、家国の為に至宝の人と成候事に候。

群臣それぞれに官職をわかち受て、君の国政を取扱ひ申候は、たとへて申さば、楽人共の鐘太鼓笙ひちりき、さまさまの道具を持よりて、一曲をかなで候やうなる物に候。五音六律調子揃ひて何の申分もなきは、明君の朝に賢臣の揃ひたるにて、すなはち聖人の御代なればいかで及べき。

この四つは、人としてのおこないの最も大事なひかえ綱ですので、これを取り逃がすようなことがあつてはなりません。家臣として、この四つのひかえ綱から離れなければ、自然に良い家臣となつて、国家のためにこのうえない貴重宝となることをございましょう。

多くの家臣が、職務を分かち合つて、君主の政治を遂行されていくことは、たとえていうならば、演奏者らが、鐘や太鼓や笙やひちりき〔箏箏〕といった様々の楽器を持ち寄つて、一つの曲を奏でるようなものでございます。音や調子がそろつていて何の申し分もないのは、賢明な君主のもとに賢明な家臣がそろつていゝこととして、とりもなおさず孔子の時代にどうして及ばないことがあります。

せめてよく心得たる上手同志の出合たる時は、
 すこしづつのめりかりは有之候へども、笙はひ
 ちりきをたすけ、かねは太鼓をたすけて、相互に人
 の間のぬけぬやうに一曲ごと故なくかなですま
 して、又もなき殊勝のきき事にて候。もし下手
 楽人のあつまりたる時は、笙は笙、笛は笛斗を
 我一と吹そうし、鐘太鼓は我一と打あげて、我
 こそ笛の上手ときかれたく、太鼓の名人とほめら
 れたく、余所の緩急めりかりにもかまはず、おの
 れおのれが調子を一ぱいにせいをはりて、したり
 がほなれ共、聞人は耳をふさぎ腹をかかへて、
 一曲の終るをまちかね候こと口をしき次第に
 候。

せめて、よく心得た上手な者同士が集まったときには、
 すこしばかり調子を整えることはあるけれども、笙はひち
 りきを助け、鐘は太鼓を助けて、お互いに間が抜けないよ
 うに一曲ごとに演奏して、またとないすぐれた音楽となり
 ます。
 もし、下手な演奏家が集まり、笙は笙、笛は笛のみと自
 分勝手に演奏し、鐘は鐘で自分勝手に打ちたたき、笛は我
 こそ一番上手だとかんで、太鼓は名人だと誉められたくて
 勝手にたたいて、演奏全体の調子を考えずに、それぞれが
 勝手に目一杯演奏して、どうだうまいだろうなどといった
 顔をしていても、聞いている人は耳をふさぎ、腹をかかえ
 て、はやく演奏が終わらないかと待ちかねているといった
 ことは、口惜しいことでございます。

是これはひとへに思おもひあふ心こころなきより、其そのなか中には実々じつじつ
上手じょうずも有あるべく候そうらへ共ども、ともどもに聞きまどはされ
て、功者こうしゃも無功者ぶこうしゃも一同いちどうに下手人へたがくじんのそしりをう
け候事そうろうこと、あぢきなきことに候そうろう。君きみの政まつりごとに
したがふ士大夫しだいふ、人々ひとびと己々おのれおのれこの所ところを心得こころえ候
はば、目出度心めでたきこころなるべくと存候ぞんじそうろう。已上いじよう。

これはひとえに、それぞれが思い合う心がないからであ
つて、そのなかに上手な演奏家がいても、下手な演奏のな
かにとけこんでしまい、上手な人も下手な人も一緒に下手
な演奏家であるといった批判を受けられることで、あじけ
ないものになってしまうのでございます。君主の政治に携
わる家臣ひとりひとりが、そのところをよく心得られるな
らば、たいへん喜ばしい心となることとございませう。
以上。

けんがくたいい
建学大意

くんしやう かじやう
君相 三個條

せいしんしゆんかしゆうどう てんちあり そのうん あらた
○星辰春夏秋冬は、天地有しより其運を改め

くんしんふ しふうふきやうだいほうゆう じんみんあり そのみち
ず。君臣父子夫婦兄弟朋友は、人民有しより其倫

あらた こうていちゆうしんじんぎ そんじやう どうくん
を改めず。孝悌忠信仁義遜讓は、道訓ありし

そのとく どうと しか じせいここん
より其徳を尚ばざるものはなし。然れば時勢古今

へん ふうぞくごほう こと あんじやうりみん
と変じ、風俗五方を異にすれども、安上利民の

まつりごと たて せんとく どうと さいしよ
政を立るには、先徳を尚ぶを最初とす。

学校を創設することの要点

君上と宰相への三力条

○星と四季は、天地ができたときからその運行を改めては

いない。君主と家臣、父と子、夫婦、兄弟、友人も、人が

生まれてからその道理を改めてはいない。孝悌こうてい（よく父母

や目上の人に仕えること）、忠信ちゆうしん（まごころ）、仁義じんぎ（親

愛のこころと、道義みちぎになうこと）、遜讓そんじやう（へりくだって

人に譲る）は、人の道の教えができてから、その徳を尊重

しない人はいない。そうであれば、時代の状況がむかしか

ら現代へと変わり、風俗が世界中変わってきても、上を安

んじ民を養う政治をおこなうには、古くからの徳を尊重し

なければならぬ。

尚徳とは魯の大夫南宮敬叔が羿善射、羿
ふねをうごかせしも ともにそのしぜんをえず う、しよくはみずからかして
盪舟、俱不得其死然、禹稷躬稼
てんかをたもつ もうし とき こうし くんしなるかなかくのごときひと
而有天下と申たる時、孔子の君子哉若人、
とくをたつとぶかなかくのごときひと
尚徳哉若人とのたまひしを以て、尚徳の
ほんぎ
本義とすべし。

徳を尊ぶとは、魯国の南敬叔が（孔子に）「羿は弓の名人
であり、羿は陸上を舟をおして進めるほどの強い力の持ち
主でありましたが、「ともに難に遭い」天寿をまつとうする
ことができませんでした。「これに反しまして」禹も稷も
ともにみずから農耕に従事しておりましたのに、禹も稷の
子孫も天子となりました。「武、それも無道の武よりも、人
格の力が大切ということでしょうか。」と、お尋ねして退
出したあと、孔子が「教養人だな、彼のような人物は。立
派な人格だな、彼のような人は。」と、おっしゃられたこと
を、徳を尊ぶということの根本の意義としなければなりま
せん。

善射しやをよくし、ふねをうごかす 盪舟ざいげい 其材芸の万人ばんにん に超絶ちようぜつ するをいふなり。しか 然れ共其人どもそのひと もとより不祥ふしょう 小人しょうじん、自己じこ 一人ひとり の欲よく を逞てい して、世よ を憂うれ へ人ひと を恤あわれ む仁心じんしん なきを以て、終もつ には身ついで を亡み ずなく に至いた れり。

弓の名人である、陸上を舟をおして進めるほどの強い力の持ち主である、という才能と技術というのは、すべての人を超えることをいうのである。しかし、その人がもともと人から喜ばれない仁徳のない人で、自分一人だけの欲望のままに振るまって、世の中のことを嘆き悲しみ、人をいつくしむ思いやりの心がなければ、しまいには身をほろぼす。

みずからか

躬稼すといふはさのみ智恵才学にもよらず、卑

じよくはんろうおよそひと

辱煩勞凡人にことなることなきに似たれども、

そのひと

其人もとより吉祥善人、自己一人の安逸を忘れ

よ うれ ひと あわれ

て、世を憂へ人を恤むの仁心切なるを以て、終に

てんか じんしん おうじゆ

は天下の人心を応受す。されば、安上利民の

まつりごと

政は、仁義徳行を尚ぶに成り、利口才智を用

やぶ

ふるに敗るること、古今の鑑瞭然たり。

ここん かがみりようぜん

(禹と稷が) 躬稼す(みずから農耕に従事する)

といふことは、それほど智恵や才気や学問に優れていたわ

けではなく、身を低くして、かたじけなく思い、心身を思

いわずらうことはほかの人と異なることはないけれども、

その人はもともとめでたいしるしをもち、心がけやおこな

いの正しい人で、自分だけが楽しむということせず、世

の中のことを心配し、人のことを考える情け深い心があつ

かったことから、ついには、民の心にこたえる君主となつ

たのである。そうであるから、上を安んじ民を利する政治

は、仁義(親愛の心と道理に適うこと)徳行(道徳にかな

った立派な行ない)を尊ぶことによつて成り立ち、ずるが

しこい者を用いることによつて失敗することは、古今の教

えに明らかである。

にちげつせいしん ばんこ てんち しょうりん しゅんかしゅうとう
日月星辰は万古の天地を照臨し、春夏秋冬は
ばんこ きせつ うんじよ ども みずからもつてろう
万古の気節を運序すれ共、自以勞とせず。
みずからもつてこう すなわちてんち だいにん み てんち
自以功とせず。即天地の大仁を見て天地の
だいじよう ゆえ このじんじよう
大譲をしるべし。故に此仁譲にのつとる人を
ゆうとくのくんし しょう このじんじよう ひと ふじよう
有徳君子と称し、此仁譲にそむける人を不祥
しょうじん なり くんしかみ くらい おんけいしも くだ
小人といふ也。君子上に位すれば恩恵下に降る
ゆえ ばんみんしょうじゆん しょうじんかみ くらい ひんぎやくかみ
故に万民承順す。小人上に位すれば貪虐上
ほしいまま ゆえ ばんみんえんぶん
に恣なり。故に万民怨憤す。

日、月、星は、大昔から天地を照らし、春夏秋冬は、大昔から季節を順序だてて巡らせているが、みずからの働きにはしない。みずからの功績だとはしない。

つまり、天地の大いなる仁（慈しみ・思いやり）を見て、天地の大いなる譲（譲り合い）を知らなければならぬ。したがって、この仁と譲に従う人を、徳（人民を教科する力）のあるりっぱな人（君子）といい、この仁徳にそむく人を、不幸な品性に欠けた人（小人）というのである。

徳のあるりっぱな人が上に立てば、恩恵が下に降り注ぐので、すべての人が従順になり、不幸な品性に欠けた人が上に立てば、貧しい者をおごい扱いをして苦しめて、上の者の勝手気ままにする。したがって、すべての人が、恨み怒る。

ちどう しょうじゆん おこ はいらん えんぶん しょう これ もつ
治道は承順に起り、悖乱は怨憤に生ず。是を以
ゆうとくのくんし そんしゆう けんいきしよく
て有徳君子を尊崇して、顕位貴職にすゑおくを
とく どうと
徳を尚ぶとはいふなり。徳は遜讓より美なるは
びとく じんしや しよぎようなり ふとく きようまん あく
なし。美德は仁者の所行也。不徳は驕満より悪
なるはなし。悪徳は不仁者の所行なり。館を
こうじよう な ふじんしや しよぎよう かん
「興讓」と名づけしこと、美德を修し悪徳を除
せんが為也。
ためなり

国を統治する道は、民の従順に始まり、おこないが道に
はずれるのは、民が恨み怒ることから始まる。であるから、
徳（人民を教科する力）のあるりっぱな人（君子）を敬つ
て称えて、位の高い貴い職務に就けることを、徳を尚ぶと
いうのである。

徳というのは、へりくだって人に譲ることより優れたも
のではない。美しい徳というのは、仁ある者のおこないであ
る。徳がないというのは、おごることが最悪である。悪徳
（道徳に背くひどいおこないをする）とは、仁の心のない
者の行ないである。学館を「興讓」と名付けたのは、美德
（道にかなったおこない）を修め、悪徳を除くためである。

○「分領」は腹の内より「分領」「侍組」は腹の内より「侍組」襦袢の内より諸人に頭をさげられ、己に西東を知に至れば、自高貴なるをしらぬ童子もなく、驕泰の心知とともに長じ、こうごう たいしん な ししよひととおり よみ 充傲の態心とともに成り、四書一通も読しらねども、元服すれば終には「十五万石」の執権になる身分と落付たる痼疾、いかなる良薬を用ひてかじんこうきようけい くんし 仁厚恭敬の君子とはなるべき。

○分け与えられた領地を持つ（分領）の身分の者は、お腹にいるときから分領の身分であり、侍組身分の者は、お腹にいるときから侍組の身分であり、幼少のときから多くの人々に頭を下げられて育ち、ものごころがついて、西東（と世間）を知るようになれば、自分自身が高貴な身分の子であるというようなことを知らない子はおらず、おごり高ぶっていばる心持ちとともに成長し、驕り高ぶる態度とともに成人し、四書『論語』、『孟子』、『大学』、『中庸』のどれも読み知らなくても、元服（成人すれば）すれば、ついに十五万石の藩の執権になる身分であると安定しきつた長いあいだなおらない病気である。どのような良い薬を用いれば仁厚（情け深く親切で）、恭敬（うやうやしい）のりっぱな人となることができるのか。

顕位けんい貴職きしよくに仁義じんぎの人なくば、何を以て忠愛ちゅうあいの徳とくを施ほどこし行おこなふべき。忠愛ちゅうあいの徳とく、上より降くだらずば、下かみ民何なんの所ところに手足てあしをおくべき。但ただし夫それとても二百年ねんらい来相濟あいすみきたる国風こくふうなればこの行末ゆくすえ何の思おもひかあらんといはば、教学きょうがくの道みちは沙汰さたにおよぶべからず。

高い位くらいの貴い職しよくに、仁義じんぎ（親愛しんあいの心こころをもち道理だうりにかなった）の人が就つかなければ、どのようにして忠愛ちゅうあい（真心しんしんをつくして慈しむ）の徳とくを施ほどこしおこなうのか。忠愛ちゅうあいの徳とくが上から降りそそいでこなければ、下の民衆たみしゆはどこに手足てあしをおいたら（からだを落ちつかせたら）いいのか。ただしそうではあっても、二百年も引き続いてきた国くにのありかたであるので、これから先も何も考えることはないであろうというのならば、教学きょうがく（教えるおしると学まなぶと）の道みちをどうこうするには及およばない。

興讓とは讓をおこすとよみ、讓を興すとは
恭遜の道を繁昌さすること也。一国万民の天と
奉仰君上の思召を以て、恭遜の道を
修業せさせ給ふ御役所にも、腹の内より貴
きものはやはり父兄の上に齒し揖遜辞讓の道を
ならはずば、何国いかなる所にてか恭遜の徳
のうるはしきを弁へしるべき。「興讓」の館に
おいて御ゆるしを受たる驕泰なれば、最早一國に
憚る所有べからず。

興讓とは、讓を興すとよみ、讓を興すとは、恭遜（慎
んでへりくだる）の道を、盛んにすることである。一國の
国民の天として仰ぎ申しあげる殿様のお考えによって設け
られた、恭遜（慎んでへりくだる）の道を修業させるお役
所において、生まれたときより高い身分の者は、やはり父
や目上の人の教えにふれて、深くお辞儀をしてへりくだり、
遠慮する道を学ばないのならば、どこの国どこの場所で恭
遜の徳の整って美しいさまを、わきまえ知ることができる
のか。興讓の館において、お許しを受けた、たかぶり、お
ごりであれば、もう、国中に気兼ねすることはない。

しかどもけいたいふしよくろくよ
然れ共卿大夫は職禄を世にし、幼弱なるも長
ろううえいきおいなりゆえもつ
老の上^{ろう}にたたねばならぬは勢也。故を以て
くんじようそのくらいとうとくそのけんおもくたま
君上より其位を貴し、其権を重し給へば、
ちようていしやく
朝廷には爵にしくはなし、爵位身にあれば如何
はすべき。氣のどくながらも長老賢者の上に座す
ちようろうけんじやかみぎ
ることぞとおもふ心をもたせんが為に、古先聖人
ためこせんせいじん
の道德を学ばせ、今日の恭敬を習はして、従来
どうとくまなきようけいならじゆうらい
の驕逸をふせぐこと也。
きよういつなり
学宮の門高きこと僅に六尺、戸扇の厚さわづ
がくきゆうもんたかわずかしゃくとせんあつ
かに三寸、内には徳行の尊きを知り、外には爵
ずんうちとうこうとうとしそとしゃく
位の貴をしらしめんこと、何の恥とかすべき。何
いとうときなんはじなん
の害とかすべき。

そうではあつても、家老（卿）、役人（大夫）は禄を代々
いただいており、幼弱な者であっても長老の上に立たねば
ならないのは必然である。であるから、殿様より、その位
を貴ばれ、その権威を重くされ、政治をおこなう場（朝廷）
においては、その爵位に及ぶものはない。その爵位があれ
ばどのようにすればいいのか。

氣の毒ではありますが、（郷・大夫の禄をいただいておる
者は、幼弱であっても）長老や賢者の上に立つことがある
と思う心を持たせるために、いにしへの聖人の道德を学ば
せて、いまあること^のうやうやしさを習わせて、それまで
のわがままを防ぐことなのである。

学問所の門の高さは、わずか六尺（一・八m）で、その
戸の厚さはわずかに三寸（九cm）でしかないが、学内では
徳行の尊さを知り、学外では、爵位の尊さを知らしめるこ
とを、どんな恥だというのか。どんな害だというのか。

是をばぢ、是を害とする心あらば、儼然たる不
これ がい ころろ げんぜん ぶ
 祥小人なり。是を群僚の上に位せしめ、
しょうしょうじん これ ぐんりょう うえ くらい
 政柄を預ること、嬰兒に白刃をあづけて僥
まつりこと ながら あずけ えいじ しらは ぎょう
 倖にけがのなきを願ふ如き心ならば、仁知の沙汰
こう ねが ごと ころろ じんち さた
 にはおよぶべからず。一国の天と奉仰君上、
いっこく てん あおぎたてまつるくんじょう
 万民の安利を思召れてこそ、もつたいなくも南郊
ばんみん あんり おほしめさ なんこう
 の汚泥に御足をけがし、鋤鋤を取給ひし其御心
おでい みあし すきくわ とりたま そのみころ
 を察奉り、世禄の大臣叢笠に風雨をしのぎ郊
さつしたてまつ せろく だいじんのかさ ふうう こう
 野に起臥するは、希代の美事、六十余州の手本な
や きが きだい みごと よしゆう てほん
 るべし。驕泰の習ひ性となり、耳目の珍らしき
きょうたい なら せい じもく めす
 所より、よからぬことと思ひ誤り、嚴刑を犯し
ところ おも あやま げんけい おか
 四方のあやしみを受ることはいかなる所より出
しほう うけ これ ところ いで
 けん。

これを恥とし、これを害と思う心があるのならば、おか
 しがたい不幸で品性に欠けた者である。この人を組織の上
 において、政治をあずけることは、乳飲み子に刀を持たせ
 ておいて、思いがけない幸運でけがをしないことを願う、
 というような心持ちであるのならば、仁の徳と知恵を指図
 するまでもない。
 一国の天として仰がれる殿様が、国民の安心と利益のこ
 とに思いを寄せられたからこそ、もつたいなくも南の郊外
 の水田において自らお田植えをなされたこと、自ら鋤、鋤
すき くわ
 を持たれたそのお心持ちをお察し申しあげて、代々の家臣
みのかさ
 が叢笠をまどって風雨をしのぎつつ、郊外で生活をしてい
 るのは、めったにない見事なことで、六十余州（全国）の
 手本である。

仁義恭敬の道を尊び、自己の身分を高ぶらすは、
いかでかか、くちをしきふるまひの有べき。前車の
覆るを見て後車の戒とす。雪ふみを先へたつ
るは、後ろより行人のたふるまじき為なり。此所
をかながみんこと、学宮の教の専要なるべし。善
にしたがふこと崩るるが如く、己をすてて人にし
たがふは古の明訓なり。

おごり高ぶっていばることが性質になってしまい、人々の注目するめずらしいことから、良くないことを考え違いして、きびしい刑の犯罪を犯してしまい、周囲からあやしまれるようなことは、どのようなところから出てくるのか。親愛の心と、道理にかなうことと、うやうやしくすることの道理を尊んでいながら、自分の身分をおごり高ぶらせるのは、どうしてか。残念な行ないである。

前を行く車が転覆するのを見て、後ろから行く車の注意とする。雪踏みを先に立てるのは、後ろから行く人が倒れないようにするためである。このところをよく考えてみる

ことが、学問所における教育の最も大切なことである。善に従うことが崩れるように広がるように、自らを捨てて人に従っていくということは、古くから明らかにされた教えである。

○水穀は人君なり。薪火は士農工商なり。卿大夫は鍋釜なり。米は上白疑ひなし。薪は燥材よく燃れども、中をへだつる鍋釜がわれひびけたらば何を以て飯をたき出すべき。先よき鍋を鑄立て、さて其上に飯の煮あんばい、火のもへかげんもいふべきことなり。釜を鑄るをはじめとす。君を鍋釜にすべからず。薪はなべかまにもならぬは、御先祖以来の常典いかがはせん。さらば鍋こそ肝要の道具なれ。

○お米は君主。それを炊きたきぎは士農工商である。卿(家老)、大夫(役人)は鍋、釜である。米は上等であることは間違いない。

たきぎは扱いがよくてよく燃えても、その間にある鍋、釜が割れていたりひびが入っていたら、どうして飯を炊くことができよう。まず、良い鍋を作って、その上で飯の炊き加減や火の加減をいうべきである。だからまず、いい釜を作ることである。君主を鍋や釜にしてはいけない。薪が鍋、釜になることができないことは、代々の決まり事ではない。だから、鍋こそが最も大事な道具である。

がくきゅう
学宮のふいごを以て、よき鍋を多く鑄立て、一国
せいめい
の性命をつなぐ飯をばたき出べきこと也。よき鍋
いたて
を鑄立ること 政の根元なれば、学宮の師長は
まつりごと ねもと
ふいごもとの惣奉行、大切の職分は申におよ
そうぶぎよう たいせつ しようぶん もうす
ばず。

もと
しかしながら元より高明賢徳一国の仰望する人
そのけんおのずとかる しか
にもあらず、其権自軽し。然れども師長は先聖
おそぼとりつき そのげん ふうし ぎよいなり
の御側取次にて其言は夫子の御意也。三奉行まづ
ひとつきひとなみこうどう はいさん しちよう けいじ きようそん
一月一次講堂に拝参し、師長に敬侍して恭遜の
れい あつく ていし おこない せい
礼を崇し、弟子の行を励すべし。こひねがはく
がくきゅう たいめん ただ
ば学宮の体面を正すにたらんか。

学問所というふいごで、良い鍋をたくさん作って、国家
の生命を保つ飯を作り出さなければならぬ。良い鍋を作
り出すことが政治の根本であるから、学問所の先生は、ふ
いごの総元締めであり、大切な職であることはいまでも
ない。

しかしながら、初めから学識が優れ、徳を備えて一国の
人々が仰ぎ見るような人でもないから、その権威は自然と
軽んじられている。だが、先生は聖人のお側取り次ぎの人
であり、その言葉は孔子のお言葉である。だから、三奉行
〔寺社、町、勘定〕がまず一月一回は講堂に出て、先生を
敬い従って、つつしみへりくだる礼儀によってあがめ奉り、
弟子としての行ないをきちんとする。そうしてひたすら願
うのは、学問所の体面をきちんとしたものにすることであ
る。

師長しちやう 二個條かじやう

○師長しちやうの任にんは人ひとに信しんぜらるるにあり。人ひとに信しんぜらるるは己おのが守まもりの堅けん固こなるにあり。己おのが守まもりの堅けん固こなるといふは、いつまでもおなじことを退たい屈くつせず、人ひとの信しん不ふ信しんをとはず勤つとめ行こなうこと也なり。久ひさしておこたらず、人ひとの信しんは其中そのなかより生しやうず。己おのが天てん性せいなればせんかたなしと自身じしんよりゆるしを出だし、企くわだて及び俯ふして就しゆうの修しゆぎやう業ぎやうをすてば、古こ人じん弦げん韋いのいましめ* 戒けいは美び行こうとするにたらず。

*韋弦いげんの佩はい。佩はいは身装具みんじやうきを帯おびびること。『韓非子』「觀行」の故事こじになむ。古代中国の戦国時代、魏の西門豹せいもんひやう（せいもんひやう）は、自分の厳格過ぎる性格を直すために、柔らかいなめし皮かわ（韋）を身に帯おびびた。春秋時代には、晋の董安于どうあんう（どうあんう）は、自分の優しすぎる（穏やかすぎる）性格を直すために、ぴんと張り詰めた弓弦きうげんを身に帯おびびたというエピソードえピソードに由来ゆらいしている。自分の性格をなおして身を修しゆめるいましめの意。

先生せんせいに対する二カ条

○先生せんせいの任務にんむは、人ひとに信用しんようされることである。人ひとに信用しんようされるには、自分自身がきちんとしてしていないといけない。自分自身がきちんとしているとは、いつまでも同じことを退たい屈くつせずに、人ひとから信用しんようされているかされていなかを問とわず勤つとめ行こなうなうことである。それをずっと続けておこたらなければ、人の信用しんようはその中から生まれ出てくる。まあこれは生まれながらのものだからといって、自らをゆるしてしまつて、何かをもくろんで、閉ふじこもつてしまい、しなければいけない修しゆ業ぎやうを捨ててしまふならば、昔むかしのひとは、弦げん韋いの戒けいめを良い行こうないとはしなかつた。

師長しちやうはまづみずからげんい 自弦章おぶを帯ごうじゆうりべし。剛柔利鈍そのさい其才ひとの

まとりはかりまに取量いちきぶつて、おのおのそな一器物ひとに備もちふるは人を用

ふる法ほうにて、人ひとを教おしえる法ほうにあらず。

求也退きゆうやしりぞく。ゆえにこれをすすめり。ゆうやひとをかぬ。故進之由也兼人

故退之ゆえにこれをしりぞけたり。とのたまもつひしを以ちゆうじて、仲尼ひとの人を

とりかたまひ給ようすひし容子もをおもちゆうじんみひとるべし。

先生はまず、弦（弓ずる）と韋（なめし皮）を身につけ

なければいけない。気性が激しい者、おとなしい者、技量

がある者、愚かな者をそれなりに取り扱って、それぞれが

ことにあたることができるようにすることは、人材を用い

る方法であって、人を教える方法ではない。

「求（冉有）は、控えめだから、前に出よと。由（子路）

は出すぎだから、控えめにと教えたのだ（結局は実行する

ので同じ結果だ。」「『論語』「先進篇」とおっしゃている

ことをもって、孔子が人を教えたようすを考えてみるこ

とある。

つよき馬は手綱をひかへ、弱き馬は鐙を入れて、
才不才もろともにすすむやうに心を尽すべきこ
となり。能を教へ、不能を矜み、書生の成敗を
己が任にして、孝悌忠臣、仁義遜讓の行義を習
慣せしめ、一館の父母となりて善を成し悪を掩ひ、
厚に厚をかさねて教化の道を補助する事を、
終食のまも油断なく心得べきこと、師長の極
意なるべし。

強い馬に乗るときは手綱を控え、弱い馬に乗るときは鐙
を入れて励ますように、才能のある者、また才能のない者
ともに進んでいけるようにと心を尽くさなければいけない。
能力のある者はさらに教え、能力のない者には心をつくし
て教え、学生の失敗は自分の責任にして、孝悌（父母に孝
行で、兄や目上の人によくしたがうこと）、忠臣（忠義をつ
くす家臣）であること、仁義（道徳上守るべき筋道）、遜讓
（へりくだり譲ること）の行ないが習慣になるようにし、
学内における父母となって、善い人になり、悪い人になら
ないようにと、厚く厚く重ねて教化の道筋を助けることを、
たとえ食事の間であっても油断することのないよう心得る
のが、先生としてもっとも重要なことである。

師長の嚴なるを尊ぶといふことは、教訓の法を
嚴正にして、子弟に怠慢を生ぜしめざるやうに取
あつかふこと也。面を四角にし臂をはり鞭打をと
りしばりて、あやまちあるは責讓せんと、ぎせい
はるを嚴にするとはいふべからず。惣て教諭の
仕法は学記に詳悉すれば、まづ此篇を講明すべ
し。

先生の威嚴を尊重するということは、教えさす方法を
嚴格で公正なものとして、学生がなまけおこたることにな
いようにするためである。

なにごとくも堅苦しくとらえ、ひじを張つてムチでたたき、
過ちを責めたて、実力がないのに勢力があるやうに見せる
(擬勢を張る) ことを、嚴肅であるといつてはいけない。

すべて、教授の方法は『学記』に詳しく著されているの
で、まづこの書物を極めて明らかにすべきである。

がくきにいわく しょうがさんをならわすは、そのはじめをかんするなり

○学記曰、小雅肆三官其始とは

こんばんけんがく しゅいなり こうじょうかん でいり そのしまい

今般建学の主意也。「興讓館」に出入して其終

ひと ぶんりょうくみがしら

はいかなる人になれる、「分領組頭」の子は

ごころう ごばんとうごじょうだいおこしろうがしら

御家老「御番頭御城代御小姓頭」ともなり群僚の

うえ くらい いっこく あんき まか さんて

上に位して一国の安危を任す「三手」の子は

おおめつけ さんさいはいろくにんとしよりしよぶぎよう しよものがしら

大目付「三宰配六人年寄諸奉行」諸物頭となり、

めい かみ れい しも ほどこ そんびきせんしよくしよ

命を上にうけ令を下に施す。尊卑貴賤職掌に

さなど かみ ほう しも ひと

差等はあれども、上に奉じ下へのぞむ人にあらざ

ゆくすえ おも めいめい こころもち

るはなし。この行末を思ひはかりて、銘々の心持

かくご たじつ しょう そな さいしよだいいち

を覚悟せしめ、他日の用に備ふること最初第一の

きようかい

教誨とすべし。

○『学記』にこうある、「小雅三を肆わすは、其の始を官

しょうがさん なら そ はじめ かん

するなり」とは、このたびの学館再興の主旨である。「興

* 讓館」で学んでどういう人になるのか。「分領組頭」の身

分の子は、家老や「御番頭、御城代、御小姓頭」ともなっ

て、諸家臣の上席となつて藩の行く末を任され、「三手」の

身分の子は大目付や「三宰配、六人年寄、諸奉行」、諸物頭

となり、上からの命令を受けて、それを下の者に下すこと

になる。位の高い者、低い者の職務に違いはあるけれども、

上の者に任せ、下の者に命令するという立場でない者はい

ない。このことをよく考えて、各自が覚悟をもつて、将来

の仕事に備えることを、まず初めの教えとしなければなら

ない。

*「小雅三を肆わすは、其の始を官するなり」

学生たちに、詩経小雅の三篇を歌うことを練習させるのは、大学入学の最初は、すなわち仕官の最初であることを知らしめるためである。

生員 一個條

○生員は命をうけて学館の弟子にえらばれたれば、在館中別の奉公とてもなし。書典に通じ徳芸にならひ、他日に上の用となるを以て、今日の業とす。その勤かたは師長の教にしたがふより外はなし。されば別に心得を論ずるに及ばず。こはある国に学館たてられし時、作りてあたへたるおきてふみなり。

学生の一カ条

○学生は、命令によって学校の生徒に選ばれたのであり、在学中は特に仕事をするのではない。書物を学び、文芸武芸を学び、将来に役立つようにすることが、毎日の勤めである。

その勤めにあつては、先生の教えに従うしかない。それゆえ、別にその心がけをいうまでもない。

こはある国が学校を建てられたとき作つて差し上げた決まりである。

*小雅三篇とは、「鹿鳴之什」の鹿鳴、四牡、皇皇者華をいう。